

「ふるさとを愛し 夢を育む 賢く優しくたくましい子」

- ・(ひ) 人の話をしっかり「きく」ことのできる子
- ・(や) やさしく 思いやりのある子
- ・(く) くじけず 最後までがんばる子
- ・(た) たくましく 健康な子



<http://www.hyakuta.m-alps.ed.jp/>

ご寄付をいただきました

学校の近くにお住いのある村松春一様より、子供たちのためにと、たくさんの教材備品を寄贈していただきました。体育館の大型スクリーン、教室で使うプロジェクターと小型スクリーン各2台、ホワイトボード、ブックトラック2台と、高額なためなかなか学校予算では購入できないものをいただくことができ、本当に助かっております。本来ならば学校に来ていただき、全校で感謝の会を開催したいところですが、新型コロナウイルスの心配もありますので、児童会長が代表して感謝の手紙を渡し、気持ちを伝えました。これから大切に使用していきたいと思っております。

ドキッとする質問 出発点はそこから

時折児童が校長室を訪ねてきます。また、すれちがった時に質問を受けることもあります。時にはお願いや不満を聞かされることもありますが・・・。

二学期のある日、6年生の女子から唐突にこんなことを質問されました。「なぜ台湾では首都といわないのですか（あるいはないのですか）？」またある時には「教科書のこの挿絵は何をしているところですか？」そのほかにも、いくつか聞かれたように思います。

私も学級担任時代は高学年を持つことがほとんどでしたが、授業をやっていてあまり考えたことはありませんでした。「台湾には台北に総統府があるから首都的機能はしているはずだけど…一つの独立国として認められていないからかなー。」「この絵にはレンガらしきものが見えるね。場所が高輪だから埋め立てているんだと思うけれど。」などと答えた記憶がありますが、自信あってのことではありません。調べてみると、台湾では法律で首都を定めていないこと、歴史的に大陸にある南京を首都と呼ぶ人がいることなどが載っていました。一部、台北が首都だという表記もありました。

国際関係や社会状況は日々変わります。歴史的認識も、次々と新しいものが発表されます。私どもも凝り固まった考えや認識に縛られることなく、新しいものを学び、新たな知識を身に付けていく必要があることを実感させられました。自由研究でも、総合的な学習の時間の学びでも、はたまた家庭学習においても、子供たちの新鮮な疑問、これこそ学びの出発点となることなのでしょう。「やらされる勉強」ではなく「進んで学ぶ勉強」となるよう、支援を続けていきたいと考えます。

Topics ② 百田保育所・百田小学校へ

遊具や学習機材が寄贈されました

9月30日(木)



百々在住の村松春一様(91歳)から、百田保育所へ園庭遊具2台、百田小学校へ体育館で使用使用する大型スクリーンとプロジェクターなどを寄贈していただきました。

市長室で行われた贈呈式では、村松様から金丸市長に目録が手渡され「散歩が大好きで、保育所や小学校の近くを通ると聞こえてくる子どもたちの笑い声や、遊んでいる姿に元気をもらっているので、お礼に子どもたちが楽しく遊べるものを贈れてよかった。また、今後も何かできないか考えています」とあいさつをいただきました。

広報南アルプス 2021.11 12



問題行動をピタリとやめる「ひと言の質問」

私が教頭時代から手に取り、何度も目を通して『学校の「当たり前」をやめた』という本があります。これは当時、東京都千代田区麹町中学校の校長先生をされていた工藤勇一先生が書かれたもので、「宿題は必要ない」、「クラス担任は廃止」、「中間・期末テストも廃止」・・・など画期的な取組を進められていました。

表紙の裏には、「みんな仲良く」と教室に掲げても、子どもたちは仲良くなりません。他者意識のない作文、目的意識のない行事、すべて、やめませんか。と書かれています。目的と手段との観点からのスクラップ、新しい学校教育の創造、当たり前を徹底的に見直す教育・・・まさに目からうろこ状態で、あっという間に読み終えてしまいます。工藤先生の取組を小学校にそのまま取り込むことは難しいことですが、我々も身の回りから少しずつ見直す必要はあると感じております。それが今、コロナ禍において一つのチャンスとなっております。卒業式や入学式をはじめ、運動会、修学旅行、授業参観、家庭訪問、校外学習、児童会活動・・・今まで当たり前計画していた行事が中止や縮小せざるを得ないという状況の中、本当に必要なものはどれなのか、どのような形ならば実施できるのか、限られた条件の中でどんな力を育みたいのか、今までは担当職員のみが中心となっていましたが、今では教職員集団が一丸となって知恵を出し合いながら進めております。

この工藤先生が述べられている下のようなコラムがあります。(上記とリンクしません)

私が長年、子どもと向き合うなかで、わかったことがあります。問題行動を起こす子どもに対して、どなったりおどしたりなど恐怖を感じさせる方法では、子どもの行動をけって変えることはできないということです。たとえ変わったように見えたとしても、子どもが自律している状態とは言えないはず。たとえばここに問題行動を起こす中学2年生の男の子がいるとします。その子に未来を想像させるのです。

「20歳になった君は、どんなことをしていると思う？」

「大学生になっている」「彼女がいる」「バイトをしている」……、彼は自由に想像し、答えます。ここからがキモです。

「じゃあ、大学生になった君は、今みたいな行動をすると思う？」

「もちろんしてないよ」

「なぜ？」

「格好悪いから」

「そうか、そりゃそうだよね。じゃあ、いつ頃（何歳頃に）、君はその行動をやめているの？」

ここで子どもたちは、「大人に叱られてその行為をやめるのではないんだ」と気付きます。将来、自分の意思で問題行動をやめている自分がいることを自覚するのです。信じられないかもしれませんが、ときにはその瞬間から、問題行動を起こさなくなる子もいます。犯罪行為や、命を危険にさらす行為を見過ごすことはできませんが、それでもそれをいつまで続けるか選ぶのは子どもたちです。道を示したり、子どもに強制したりすることは、あまり意味はないのかもしれませんが、自分で考え、自分で決める、そんな子どもを育てるためには、本人に「選ばせる」ことが大切です

怒るのではなく考えさせ、決めさせる…何か参考になったでしょうか。

